

いわゆる「隠れたカリキュラム」に焦点を当ててきた。しかし、児童・生徒は、学校環境や教師の言動をただ受動的に受け止めるだけの存在ではない。学校内でのジェンダー再生産と変容は、学校・教師・子どものダイナミックな関係性や、地域社会との関係性の中で生起していると考えられる。

このような視点にたつて、今回は学校という場に焦点を当て、教師と児童の双方にある程度対応する内容を質問するような調査を企画した。そのことによって次の5点をあきらかにすることをめざしている。第一に、児童・生徒たちのジェンダー意識が、教師の側のジェンダー意識と関連があるのを探る。第二に、教師自身のジェンダー意識と教師文化との関係を探る。第三に、家庭とそれを取り巻く地域社会から影響、家事手伝いや親の共働きの影響などをあきらかにする。第四に、ジェンダー意識や規範が、活動している地域社会によって相違するか否かを明らかにする。第五に、児童・生徒のジェンダー意識が、児童・生徒の自己像や将来像にどうつながっているのを探る。

II

調査結果の概要

(1) 調査対象者について

調査対象者：この調査は小学校児童4年生と6年生、中学校2年の生徒、小・中学校教師をそれぞれ200名前後調査することを目標に、福島県福島市、会津若松市、猪苗代町、東京都国分寺市、神奈川県相模原市の各教育委員会にお願いして、それらの人数を確保できる小・中学校を紹介していただき、実施した。

調査実施方法：児童・生徒については、各学校の教室で教師の指導のもと無記名自記式、教師については、対象は校長、副校長、養護教諭を除く教諭とし、無記名自記式で、各自のり付き封筒を配布し、学校が回収後も封をしたまま保管することを依頼した。

調査実施期間：2006年8月～11月

以上から合計として小4は911名、小6は896名、中2は885名で合計2692名、教師は636名を得た。

調査対象児童・生徒（地域・学年別％）

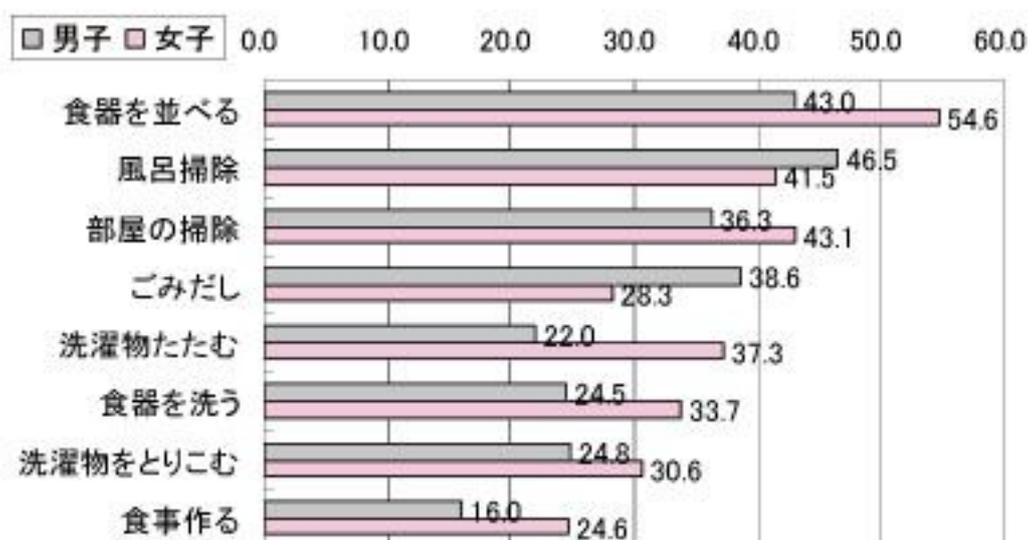
	合計	上段…人数 下段…％		
		小4	小6	中2
福島市	715	268	213	234
	100.0	37.5	29.8	32.7
会津	620	192	215	213
	100.0	31.0	34.7	34.4
国分寺	749	246	266	237
	100.0	32.8	35.5	31.6
相模原	608	205	202	201
	100.0	33.7	33.2	33.1
合計	2692	911	896	885
	100.0	33.8	33.3	32.9

調査対象教師（地域・男女％）

	合計	上段…人数 下段…％	
		女性	男性
福島市	162	100	62
	100.0	61.7	38.3
会津	116	58	58
	100.0	50.0	50.0
国分寺	161	79	82
	100.0	49.1	50.9
相模原	197	115	82
	100.0	58.4	41.6
合計	636	352	284
	100.0	55.3	44.7

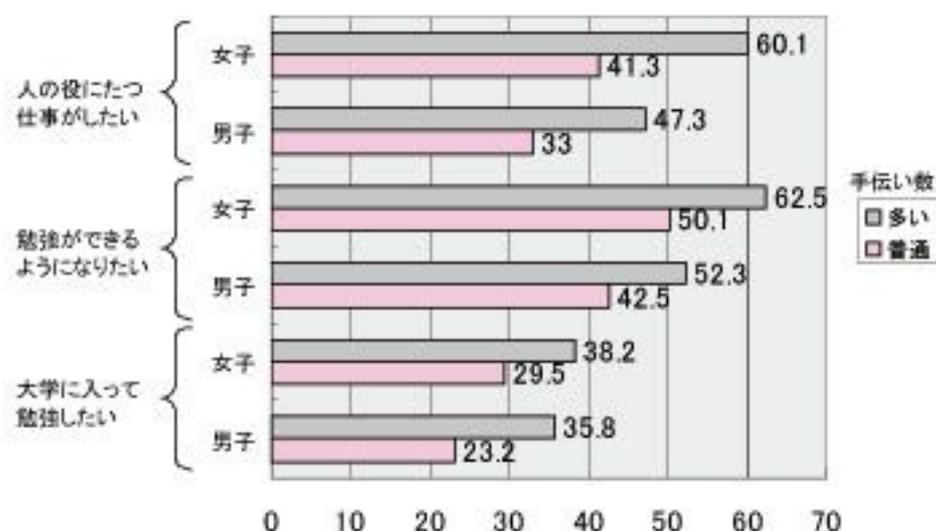
(2) 家庭での児童・生徒

家庭でのジェンダー意識形成の契機の一つとして家事手伝いに注目した。家庭での「いつもしている手伝い」を以下のグラフに示す8項目に分けて聞き、あてはまるものすべてに○をつけてもらった。「いつもしている手伝いはない」はわずか11.4%で、およそ9割の者は何らかの手伝いをしているといえる。



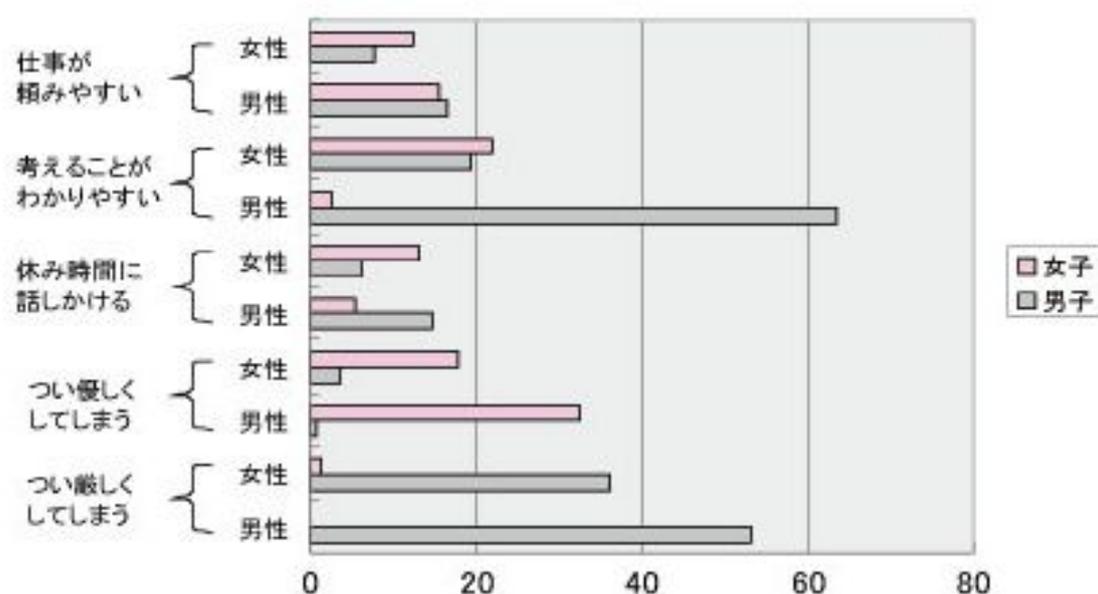
家事を手伝う比率が男女でどう異なるかを見てみると、どの項目でも有意な男女差が見られたが、男子の方が高率に手伝っていたのは「風呂掃除」と「ごみだし」の2項目であった。他の6項目では女子の方が高率に手伝っており、大体10%前後の差異があった。

さらに、手伝いの多さと将来像との関連をみるために、行っている家事の項目数を数え、「普通(2項目以下)」の子と、「多い(5個以上)」子どもでどのように達成意欲が異なるかを男女別にグラフで示した。「大学に入って勉強したい」「勉強ができるようになりたい」「人の役にたつ仕事がしたい」などについて、手伝いが多い子ほど、男女共に有意に達成意欲が強い。この結果から予想されるように、女子の方が手伝いは多いため、女子の方が男子より達成意欲が高い子が多いという結果になった。



(3) 教師と子どもとの関係

教師調査では、学校内で教師が子どもたちに対して行っている様々な働きかけ行為(下のグラフ項目など)が、男子と女子のどちらに偏っているのかを検討した。下のグラフは、「女子のほう」「どちらかという女子のほう」の合計を「女子」とし、「男子のほう」「どちらかという男子のほう」の合計を「男子」として、それぞれ棒グラフで教師の性別に示している。



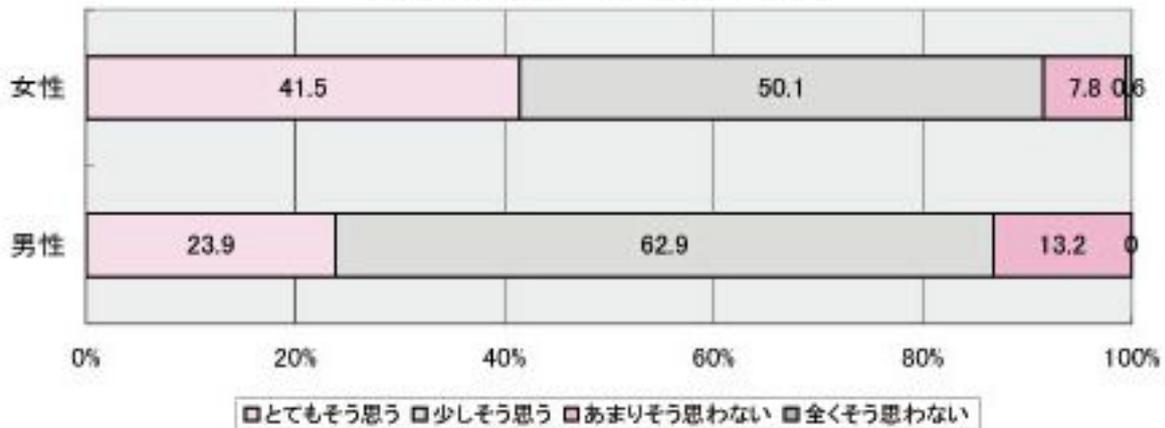
グラフには見られないが、大半の教師は「男女同じくらい」と答えており、学校内では男女に同じように接するように心がけられていることがわかる。しかし、グラフのように、男性教師と女性教師で、あるいは相手が男子か女子かで、認知された児童・生徒に対する働きかけ行為の違いがみられる。「厳しく」「優しく」接することについては、男性も女性も教師は男子に厳しく、女子に優しくしている。特に男性教師にその傾向が強い。「話しかける」「考えることがわかりやすい」「仕事が進みやすい」といったコミュニケーションについては、男性教師も女性教師も自分と同姓である生徒に対して積極的に行っている。このように、教師と子どもの間では、同性間の方が異性間よりも身近に感じていることがわかり、心理的距離が近いものとなっている。

(4) 教師のジェンダーに対する考え方について

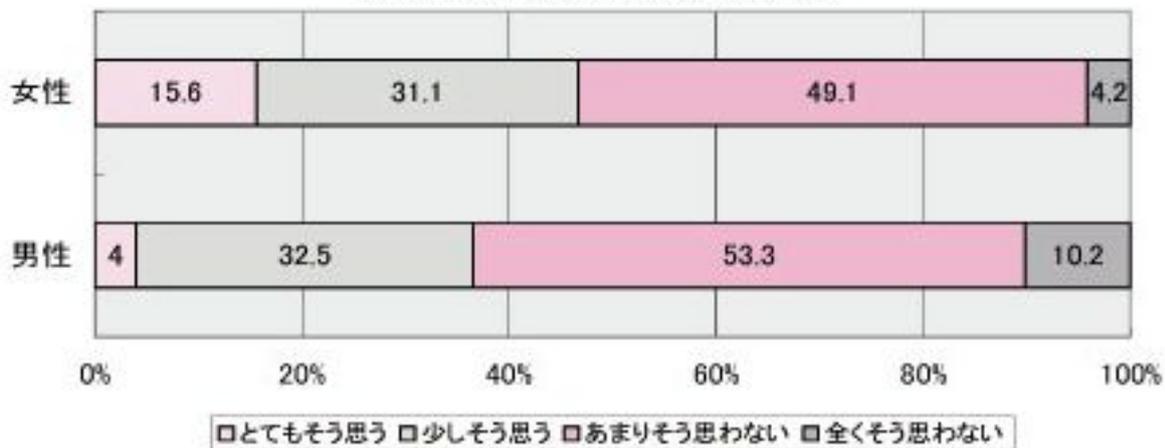
ジェンダーに関しての考え方を示し、それについてどう思うかを「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」4つの選択肢で尋ねた。その中のいくつかを教師の性別にグラフに示した。

ジェンダーについての考え方（男女別％）

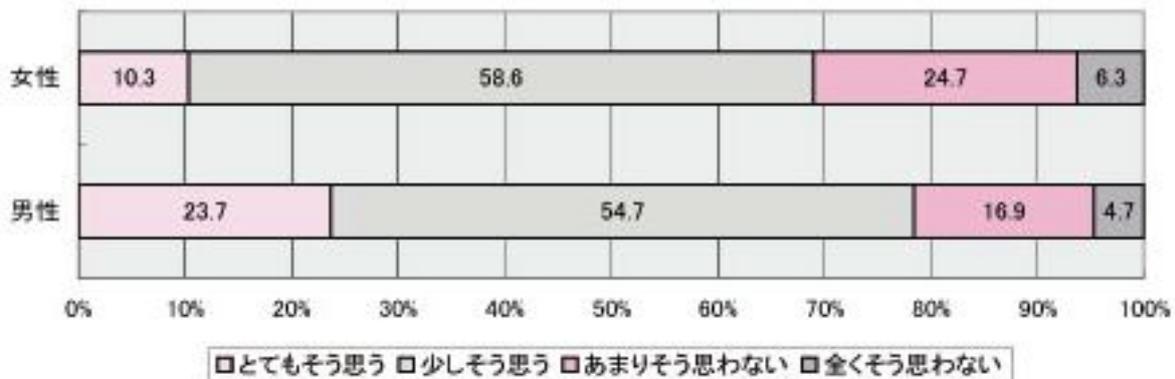
男女の違いを認め合い、補い合うことが大切だ



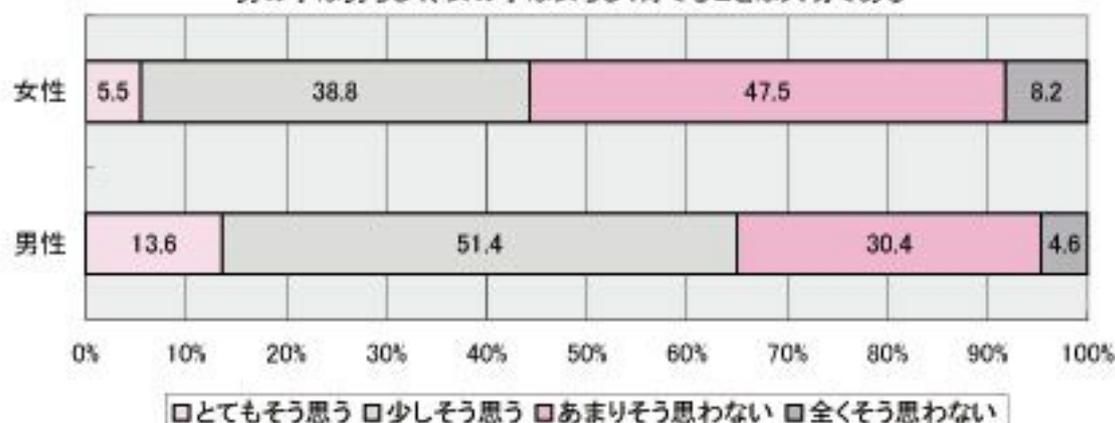
女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をすることもそれと同じくらい重要である



能力や適性は男女で異なる



男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である



男女の教師の意識の差を見ると、上記グラフに示したように、「男女の違いを認め合い、補い合うことが大切だ」と「女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である」については、女性教師の肯定率が高く、「能力や適性は男女で異なる」と「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である」の設問では、男性教師の方が「とてもそう思う」と回答した割合が高かった。すなわち、女性の社会進出を肯定し、男女平等を志向する2項目は女性が肯定する割合が高く、男女差を認め、性別役割を肯定する質問項目については男性が肯定する割合が高かった。

III

まとめ

以上から、家庭での手伝いは女子が男子より多くしており、これは従来のジェンダー規範の残存ゆえと思われるが、結果としてはかえって女子の自己有用感や肯定感を増して積極的な将来像につながっている可能性が示唆された。学校においては、教師の性別によってジェンダー規範には微妙な差異があることや、子どもに対する教師の態度にも男子か女子かで若干の差異があることもわかった。それらが子どもの自己像や将来像に影響を与えるであろうことは容易に想像できる。

ただし、児童・生徒は家庭、学校、マスメディアなどのさまざまな影響を受けつつ自己像や将来像を形成していくのであり、その過程はきわめて複雑なものである。調査はその一局面をきりとしたものにすぎず、今後も様々な分析を重ねていく予定である。また児童・生徒の学年別にも多様な差異が見られており、地域差などについても詳しくは報告書の方を参照していただきたいと考えている。